

---

# 痛い痛いのとんでいけ

(その三)

——ぶどう 一つ 200えん——

燕木寿江

七月九日

朝から園長室にいて小包の切手を欲しがったり箱にしまったりする。事務室では椅子を並べて乗り物ごっこをして先生を呼ぶ。少し座わると満足していた。遊びは続かず、こんどは職員靴箱の名札を全部取ってしまう。

「もとのところに入れてね」と言うところを変えてわざわざ入れる。友達がプールのしたくをしているのを見ると「僕も入りたい」と言うので水着に着替えさせると、誰も入らないうちに一人で入ってしまう。ヤンチャリカのレコードをかけて準備体操をしていると「この歌っている声はきらいだよ」と言う。

歌詞の中に、「一・二・三・四、二・二・三」と歌うところがある。これが何の数字なのかわからない、といていやがる。プールの中では外の友達に水をかけたり、中の友達に水をかけたりして喜ぶ。お弁当のタッパーの蓋

があかず、待っているうちに機嫌が悪くなり泣いて怒る。カレーカールと焼いたパンが入っていた。パンはしょっぱいからと言ってカールを食べる。「おいしそう、カールをもらっちゃうかな」と言うと「とられちゃう」とかくしたりして、子どもらしい可愛い動作をする。しばらく先生の股に首をつっ込んで寝た様子をしていたが、十二時過ぎてもお迎えがないので電話をかける。

七月十日

登園するとすぐにトランポリンに走っていき友達が乗っていると、「待てない」と言って先生に抱っこして待つ。友達が降りるとしばらく一人で乗っていた。トランポリンに寝るので子守歌を弾き、起きると行進曲を弾くと喜んで友達にも、「乗れー」と言って何回も繰り返えていたが、急に走って園長室に

いき封書の切手を切らせてもらったり、バザーの券を用意している役員さんのお手伝いをして組別に券を揃えたりした。十時三十分頃プールのしたくをする。男女に分けて並べていると「どうして、列になるの？ どうして？」と何度も聞きかえした。「半分ずつ入るのよ」と言いながら並ばせていると自分もちゃんと列に並んだ。プールの中でM先生についてまわっていて楽しそうだった。一番最後にプールからでてきた。タオルに包んで頭から念入りに拭いた。細い腕にシャツを着せる。いい顔をして甘えていたのにすぐに走って行って事務室からバザーの券を沢山持ってきてしまう「お弁当食べる？」と聞くと机に顔を臥せている。バザーの券が気になるようだ。どこへ行っても物がある。それによって興奮するK夫を見ると、「幼稚園に来てよいか？」と思う。本当にいいのか。わ

からない。

七月十一日

「幼稚園に行きたくない」と言ったらけれど、お母さんが「歯医者に行かなければならないからね」と言うと、「来る気になったみたい」と言ってK夫を連れてきた。しばらく園庭の蟻をしゃがんでじっと見ていた。年少さんが事務室で体重を計っていると「15.k」と正しく目盛を読んだ。覗いている友達の手をとって体重計にのせては計ってあげていた。名前のはんこを押していたが、あまり強くやっつてゴムがとれてしまうと「ごめんさい」と言った。昨日は「ありがとう」と言った。園長先生がペープサートの大きい絵を描いていると、数人の友達と見ていた。そして絵の具のガラス瓶を並べかえたりしていた。名前は「んこうを散らかしたので」「片づけましよう」

と言うと「どうして？」が始まる。それに答えないうで片づけていると自分も片づけたり、友達に渡したりしていた。年少組で大きい積木で道ができているのを見て、ジャンケンで勝つとこっちの道をいくというようにきめて遊んでから、またペープサートの絵を見にいった。五十円券で買えるバザーの見本が十点余りおいてあったのを見つけて「これなあに？」と聞く。「K夫ちゃん、どれが欲しいの？」と聞くと、「眼鏡と火花が欲しい」と言う。ひっくり返えして見ていたが、胸の名札を見ては名前を呼んで手をつないで、友達を連れてきた「ゆきこちゃん、どれ欲しいの？」と聞いていた。次から次から友達を呼んできては聞いていた。お母さんにその様子を話してあげたが、「そうですか」で終ってしまつた。感動しているのはK夫のこっち側の人間なのか——。

九月一日

長い夏休みで切手のことは忘れれたと思って、いたのに各部屋を駆けずり廻って集めていた。まことちゃん達が椅子取りゲームをしていたのでK夫も誘ってみた。すぐに部屋にきて仲間に入る。椅子は三十個程あって七人でやっているのだからK夫が交っても安心である。友達に椅子を減らそうとすると「取らないで」と言うのでそのまま繰り返す。丸くしないで四角く、椅子と椅子の間をあげないで、と言い張る。友達にくっついて座ったり、先生の傍に座る。「僕がピアノを弾く」と言いつて鳴らす。「もつと早く」と言いつて早く弾くと皆が合せて走る。ゆっくり弾くとゆっくり歩く、みえ子ちゃんが「私も弾きたい」と言つた。K夫が「だめ」と一度言つたが自分が弾き終ると代つてあげた。二十分位

よくやっていた。

九月三日

一のバスの友達と砂場で遊んでいるとK夫が登園してきた。「砂場で遊ばない？」と誘つたが切手を探しに部屋を走り廻つていた。お母さんが抱っこして砂場の先生のところにお母さんを連れてきた。お母さんに先生の意志が通じたような気がした。けれど、友達がつくつたお山のトンネルの上につて次々とこわして歩く。「みんなK夫ちゃんにやさしくしてくれるのに、どうして一生懸命つくつたものをこわすの！ お友達が悲しい顔をしてるわよ。」と話す部屋に帰つてしまふ。せつかく外で遊ぼうとしていたのに……。M先生が、「お砂場で蕪木先生待っているわよ」と言つたが膝に抱っこしたまま来なかつた。理屈っぽく言つたり、お説教したり、親切をお

しつけるのはよいことではない。

運動会のリレーの選手を決めるので外で集るとK夫も先生と外に出てきた。自分もかぶっていないのに「赤・白帽子をかぶっていない人が一人います」と言った。(友達がだんだん見えてきたのか——)みんなが走り始めると自分も途中から走ってきて「一等賞」と何回でもやる。八回走った。決勝の白いテープを持ちたいというので頼んだ。走ってくるのとテープを持ったまま部屋に入っていきまう。迎えにいくと「暑い、暑い」と言っ  
てお布団を敷いてもらう。一寸寝ただけで園長室のものをいろいろ出して見ていた。お母さんが迎えにくると「もうお帰りの？一日の時間って短いんだね」と言いながらおんぶしないで歩いて帰った。

九月五日

棚の葡萄を取っていると登園してきた。「K夫ちゃん、一緒に取らない？」と言うと、お母さんに取って貰ったが自分では取らなかつた。友達の取った葡萄をそおと両手で箱に入れる係を三十分以上もやっていた。一寸いなくなったら「お、お、お、お、お」と自分で書いた紙を持ってきた。そして大きな声で「いらっしゃい、いらっしゃい」と、お店やさんになった。かごや、袋を持って買いくる友達に一つずつ渡していた。だまって立っている友達に「あなた、食べなさい」と葡萄をあげるけれど自分では食べない。四のバスがきてみんな取り終ると吊り橋に乗って遊んだ。初めてである。乗っていた友達がジャンブルジムの方へ行ってしまおうと「お友達、どうしていつっちゃうの？」と聞くので、「K夫ちゃんも行ってごらんなさい」と言っ

たがジャングルジムには乗れなかった。「吊り橋につかまる綱がどうしてあるの?」と聞いた。二回聞いたけれどそれだけでしつこくは聞かなかった。事務室へ行って今日来た郵便物の切手を欲しかったが、「これ缺で切ってもいいですか?」と聞くようになった。

(おばあちゃんの家で一人で泊ると言って休む)

九月十三日

久しぶりで来たせいかな駆け廻ったり、先生にびったりくっついていたり、園長室の引出しを開けたり、スタンブリンクを持ち出したりと、落ちつかない半日だった。K夫も一緒に友達の中に入れて遊ぼうとするが、大人との会話に寄りかかることが多く考えさせられてしまう。

九月十四日

登園してすぐにままごとセットの道具をけとばす。急須がころがるとそれをまたける。ゆうちゃんが「K夫ちゃん、切手持ってきたよ」と言ったら手渡す。嬉しそうに見ていたが思いだしたようにそれを握って年少の部屋に走って行った。そして気にいった切手だけを探し、あとはごみ箱に捨てた。部屋でオブジェテープでんとう虫をつくっていたことみちゃんが「K夫ちゃんもつくる?」といってテープを渡そうとすると椅子を投げた。外に出るとしゃがんで遊んでいる年少の友達の後ろから手押車をぶつけた。あまり何度もするのでK夫の背中を「ドン」と声を立ててたたいた。「車でやられるともっと痛いよ」と言うと黙っていたが車をやめてしまった。砂場の友達の中に入って木製の自動車を押しして遊んでいた。年長が二人一組になってだるま

運びの練習をしだすと自分も「一番前がいい」と言っていてクラスの先頭になって番を待っていたが、だるまから離れられずK夫だけは何回も往復した。「こんどお友達の番よ」と言うと、だるまに馬乗りになって競技をやめさせてしまった。友達が困るようなことをしながらも大人を通して友達の中に少しずつでも入っていつているような気がする。運動会のラインを見て「どうして消えるのに何度も書くの？」と言う。部屋でパンダの絵本を見ながら、北京・南京・上海と漢字で書いた地図をつくる。

九月十七日

部屋の中は物があり過ぎるし、できるだけ外で遊ぶようにしようと登園を待って外にでた。砂場の黄色い茶碗が欲しくて、友達のをとりあげたり投げつけたりした。黄色の手押

車が欲しいというので借りて渡すと、こんどは黄色のボール・黄色の茶碗全部が欲しくなってきた。また物にこだわり始める。丁度、実習生が銀杏の樹の下のベンチに、にここに飛んだ表情でいたら、K夫はお茶碗を離して飛んでいる、忙しそうに、口うるさい先生よりは、ゆったりとした人の傍が安心なんだなあ、としみじみ教えられる。（つづく）

（神奈川・市が尾幼稚園）